

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 181号

平成29年5月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

新渡戸稲造『人生雑感』より (1)

新渡戸稲造『人生雑感』は、『新渡戸稲造全集』第10巻に収められている。その巻の解説者上代たの氏は、「解題」で、次のように記している。

『人生雑感』は、大正4年2月、警醒社書店から、新渡戸稲造述、国井通太郎編として出版された。…その内容は著者がおよそ1906年から13年頃までの間に、すなわち大体一高校長時代に、主として、フレンド派の集会において…述べられた宗教的感想その他を収録したものである。」

また、「解説」では、「『人生雑感』は、新渡戸先生が、先生自身が属された教会ともいべき、芝三田のフレンド派の集会や、その他の会合で、幾年かにわたり述べられた宗教的な談話20余篇を集めたものである。…先生には、特に宗教を主題とした著述もないし、またいわゆる説教らしい説話も少ない。そのことは、新渡戸先生の宗教を探求しようと企てる場合の困難を何人にも感じさせる。そのような事情の下で、『人生雑感』は、…先生の宗教思想を、まとめて公刊されたものとして、注目に価するものである。」

新渡戸先生の「序文」には、次のように書かれている。

「普連土教会において折々述べた宗教的雑感は、ただその時々事に触れて起った感想なれば、一時的のものとみなしていた。然るに友人国井通太郎氏がその都度書き留め居られたものにや、数日の後あるいは数月後に文につづりて示された。余はその労を多とする、しかし元より多少永久的なる書物の形として世に公にするほどの名論卓説にあらざるが故に、今これを上梓することは大いに躊躇するところである。ことに世の聴衆の大多数は女学生であったがための語る所も簡易ならんことを務めた。……」

また、国井通太郎氏の「序」には、次のように書かれている。

「私は、片田舎の活版工でかたわら伝道を致して居る者であります。私が東京において青山の神学校に通っていた時に、宗派を同じうする関係から新渡戸先生

を知ることができまして、先生の講演なさるる処へは大概行きましてお話を聴きました。そのため私というものが神の人格に近づけられたことは少なくありませんでした。その結果私の編輯しておりました雑誌や私の聴いたものや他の雑誌で読んだものを編輯して、先生のもとに持って参りまして出版を許されんことを望みました。先生は拙き編集に御小言も申されませんで快く御承諾下さいまして、このたび『人生雑感』と題して世に出ることになりました。

1915年1月23日

常陸国港町活版工場にて国井通太郎識

宗教とは何ぞや (1)

宗教とは何ぞやという問題について、少しく近頃の所感を述べてみたいと思う。

かかる問題を研究するのは、哲学者や、神学者や、社会学者などの仕事で、俗人の関係すべき所でないと思うものが多くある。そればかりではない、宗教家でさへも、かような問題を考究するのは、学者の役目で、自分たちには何の必要もない事と思っている。そはともかくも今や私が本題を掲げて、所感を述ぶるに当たり、あるいは解剖し、あるいは分類して、科学的に宗教を論ずるのであらうと、考えておらるる人もあるかも知らぬ。けれども私は決してさような事をなさんとする者ではない。なぜなれば宗教は生命である、力である、学問や理屈ではない、ゆえに学問をもって推求することはできぬものである、この前提を掲げて、本論を始めんとするのである。

宗教とは何ぞや (2)

宗教も…学理の外に超然たるものなれば、哲学や神学や科学をもって、これを解釈することはできぬ。カーライルは宗教の説く所の重要な点は「神の存在と霊魂の不滅であるが、このことはただ信ずべきものにして、20年考えても、2000年考えても、解することのできぬものである」と言っている。

カントも神の存在論と、霊魂の不滅論には、ついに筆を投げうつたと聞いている。霊魂の不滅であるや否や、神は果たして存在するや否や等の議論に至っては、賛否ともよく成立する論である。これは議論ではとてもわからない、信ずるよりほかはないのである。既に信ずべくして説くべからずとすれば、学理の範囲を全く脱しているのである。

宗教とは何ぞや (3)

しからば学理をもって、宗教を解することができぬとすれば、宗教はいかなるものをもって、これを解するが至当であるかという問題になる。人間最上の力は理性であると信ぜられているのに、この理性の力にて、宗教を解する事ができぬとすれば、宗教の解釈はとも人間の力ではできぬものとなるから、かえってこれを打ち捨ててしまった方が得策ではないかという、ある学者は然りと答えるのである。孔子の如きもまたこれに類似の言を吐いている、すなわち、「天や神のことは人間の力では分らぬ。これらの事は説明することはできぬ」と言っている。実験論派の人も、宗教は智識以外のものであると言っている。また一派の人々は宗教は一の方便に過ぎぬもので、未開の民を導く道具である、今日の文明社会には不必要であると言っている。この説は日本にもだいぶ行われているが、宗教は迷信であると説く人々も多くある。しかるに宗教とは果たしてさようなものであろうか。

宗教とは何ぞや (4)

学理をもって宗教を説かんとする神学者が多くある中にて、哲学
文学等あらゆる当代の学問に精通したゲーテは

「宗教は感情なり」

と言って、学理を全くその中より除いたのは、実に聴くべきこと
であると思う。されば感情は止めんとして、止むることのできぬ荒馬
の如きものであれば、宗教はただ感情のみと言わばこれまた迷信と
扱ふところなきに至るではないか。

昨年ブース大将歓迎会の際、私は

「宗教は意志の働きのなり」

と述べたが、「宗教は意志の働きのなり」とはいかなる理由であるかと、
爾来数他の人に詰問せられたが、私はあえて説を吐いて人を迷わす
を好まぬ。宗教は理性にあらざるとともに、感情のみにて全きを得
るものでもない。

宗教とは何ぞや (5)

そこで理性によって解き能わぬものを信ずる一種の剛き意志こそ
実に、宗教の根底でなければならぬと思うのである。聖書に神の旨
を行う者は、神を知れるなりという意味の文字がある。意志の力の
みにて信ずるだけでは、まだいたれりと言うを得ない、また信じて
知るのみにても、まだ全きを得たものでもない。只信じて知るのみ
ならば、悪魔と言えどもこれをよくするのである。知ると共にこと
ごとくこれを行うというに至って、初めて宗教の極意に達し、その
光明に輝らされたものなりと言われよう。

王陽明の「知行一致」とはすなわちこれである。神の意に違わざ
る行をするのが宗教で、神の意は是れであるとか、彼れであるとか
論ずるのみにて、これを実行せざるは宗教ではないと思う。

宗教とは何ぞや（6）

宗教とは神の道にかなえる行を、為すことにて、聞いたり、語ったりするばかりではない。身に現わすことである。キリスト教の信者はキリストの権化とならねばならぬ。キリストも「灯火をますの下に隠さず、高き所に置いて、周囲を照らせよ」と言われている。しかし他の人にまねて照らすのではない。己れに有する光が、自然に外に出るようにならねばならぬのである。

うつるとは月も思わずうつすとは水も思わぬ広沢の池

という和歌がある。月は人に見せんとて照るのではない、広沢の池も月をうつして見せてやろうと、婦人が美服をつけて、人に美わしい姿を見せようとするがごときではない。月も水も期せずして、自然にその美を水面に顕しているのである。これぞ権化の真意にして、あえて神の光を顕さんとにあらず、神の意にかなうことを知りて、日々にこれを実行すると自然にその身から光が出るのである。……神の力が人の心に働き、さらにこれが外部に顕わるるに至るありさまは、人々の個性によって異ならねばならぬはずである。各人同一の神に、その心が照らさるるなれども、その光が身の外に顕わるる時は、各々光の色が違って見える。

宗教とは何ぞや (7)

天を仰いで月を見れば、さえたる月はただ一つである。しかも川風のために、うねうねと、打つ波はおのおの異なった月を乗せて流れ行く。神は天にも地にも一つである。されど神の姿が各人の心に映じて、さらにこれを他に反射する時は、あるいは半月に、あるいは三日月に、あるいは円形となって見ゆるのである。これを一様の形に映じて見せんとするから形式に陥るのである。「宗教とは神の力が、人の心に働きて、その人に特有の働きをなさしむるものである。」

...

「宗教とは人が神の力を受けて、これを消化し己の性質に同化して、己のものとして、これを他に顕すことを言うのである」

故に宗教は決して理論や学問ではない。推理の法によって、これを研究することは到底できぬのである。そこで釈迦もキリストも、各自の宗教を説明するに多くたとえをもってせられた。

宗教とは何ぞや（8）

宗教もこれと同じことで、学者の言うことがみな嘘とは言えない。真実の事も多くある。しかし学者の知らない一の力が、人間の精神に入って、それが精神の糧となる。精神はこの糧を得てこれを消化し、これと同化する。その働きが宗教である。宗教は力である。あらゆるものを集め来たって、神の力によってこれを消化し、形に表わす働作である。かく消化したものは愛の形をとって現われる。

宗教とは何ぞや（9）

心に信仰があれば、眼に一種の光気を現わす。眼ばかりではない。手にも足にも体にも現われ来る。ある人が禅学をやって、悟りを開いたと思って喜んで、師僧のもとに急いでかけて行って、「悟りました」というと、師僧はうしろに向いたまま、「まだいかん、まだいかん」と言って取り合わぬ。仕方がないから、帰ってまた考える。今度は確かに悟ったと思ったから、またかけて師僧のところへ行くと、やはり以前の通りでさらに取り合ってくれぬ。

かくすること20回に及んで、最後に疑いがみな解けて、自ら明らかに信ずることを得たから、静かに立って師僧のもとに行って、柔らかな言葉で、「師僧よ」と呼ぶと、師僧は「おうよう悟った」と言われたので、「いえ、まだ説明しません」というと、「説明は不要」と答えられたという話がある。この師僧は背向きのままで、足音を聞いてその人の悟りの有無を知られたのである。信仰は顔にも現われるれば、声にも現われる。心が愛に満ちて邪念なければ、その人は何となく慕わしく、何やら神のように思われる。これをなさしむるものがすなわち宗教で、神の力である。

宗教とは何ぞや（10）

議論で宗教を研究しようとするのは、宗教の周囲をぶらぶらうろつくようなものである。いつまでうろついて、決して宗教の本体に触れることはできぬ。敵をも愛する心や、小児のような純粹の心は、どうしてこれを得ることができるかという、千万言の立派な理屈を並べ立てても、決してできるものではない。キリストが空の鳥を指し、野のユリを示し、汝まず神の国とその義とを求めよ、その他のことはまず第2第3の位置に置いておくと、教えたのも全くこれである。そこで宗教とはなんぞやと問えば、私の答えは神に接して力を得、これを消化し同化して、現わす力であると言わねばならぬ。宗教の奥義は解きがたくまた考え難い。学説や理論はこのことに就いては何の用もなさぬ。ただ朝夕の祈祷において、神に近づき、神に交わり、神の力を心に実験して、これを身に表わすようにすることが何より肝要のことである。宗教を研究するは実行においてするのほかはないから、いささかこの事を諸君の前に述べて、吾人が神より受けた恩恵を同胞兄弟の間にわかつようにいたしたく思うのである。